

署中稽古、機関誌「宏道」の発行も、
全て少額の会費でまかなっている。

運営は、会長の長野善光氏その他、
副会長が2名、幹事長1名、副幹事長
1名、幹事10名でまかなう。主たる
運営は幹事長に一任し、年間行事を
決め、また定期的に道場内で会合を
持つ。

運営をまかなえない部分は父兄や
大人の応援で補充する。たとえば、
道場の建てかえ、増築や改築などの
時、父兄や大人の資金援助でやって
きた。

こうして三期にわたり、今日の宏
道会道場が完成した。小さいながら
も、宏道会の道場は神をとり入れ、
敬園の中に、息づく。

道場の上座中央には、宏道会をパ
ックアップされ、宏道会の生みの親
でもある耕雲庵英山老師の「剣神一
味」の書が、天井寄りの高い位置に
飾られている。

また、中央には「倚天寒」の縦書
きの書が、いづれも、稽古にくる会
員たちを、時には厳しく、時には温
い眼で見守っている。

稽古開始。
子供も大人も、正面に向かい合撃。
その後で「五戒」を声高に誦んだ。
稽古日は大人の場合、毎週火・水・木・金の朝
6時から7時まで。
夜は、火・水・木の三日間。5時から7時30分
まで行なわれる。水曜日の夜に限り、子供の稽古
終了後、大人たちの小野派一刀流の形の稽古が9
時まで行なわれる。



人間禅道場写真上で坐禅をすませたあと同じ敷地内の宏道会剣道場(写真下)で稽古



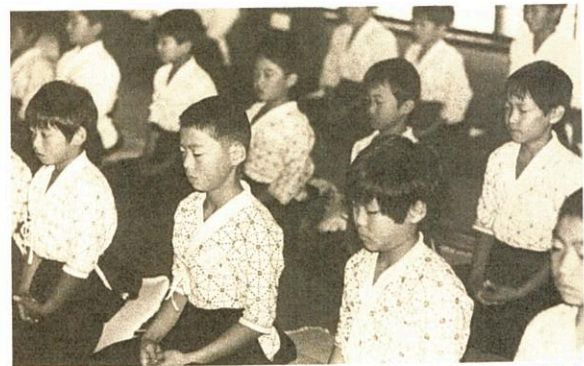
宏道会の師範は、警視庁名誉師範の小川忠太郎
範士(82歳)である。
小川師範は、毎週一回、自宅の世田谷から千葉
の市川市まで、電車でやってくる。
宏道会の剣道は「剣神一如」にある。本当の
人間至誠の人になるための行である。
ここの剣道は、小野派一刀流組太刀を主とし
ている。一刀流は切り落しに始まり、切り落しに

終わる。最初の組太刀「二つ勝」切り落しが本
に分れば、免許皆伝をわたすと教えられている。
長野善光会長はすでに伝授された。
また宏道会の会員には「一心二刀の切り落し」
即ち至誠が秘められている。一刀流組太刀の修行
に全力を尽して人間形成につとめるのが小川忠太
郎師範の教えである。小川忠太郎師範は「宏道会
の剣道」について次のように語っている。

道とは根本的に異なります。自己に納得のいく真
の剣道を深く究めんとする者には、禅の修行が必要
である。禅の修行で剣の奥義に達した実例は、
山岡鉄舟先生のほか多くあります」
宏道会は、一刀流組太刀の名人の言われた寺田
五郎右衛門宗有、山岡鉄舟の流れをくむ。
禅をとり入れた剣道は、ここ宏道会では山岡鉄
舟から小川忠太郎師範、そして長野善光会長に受
けつがれている。
手本になるものは、常に山岡鉄舟である。

求道者たちが つくった道場

「人間禅教団」の前身は、両忘禅協会である。
これは、山岡鉄舟居士、高橋泥舟居士から続く。
人間禅教団名誉総裁だった、耕雲庵立田英山老
大師は、85歳で帰寂されたが、この立田英山老
大師は、東大生物学科在学中、大正五年、下谷の谷
中天王寺の沢木道場にいた両忘庵釈宗活老師を訪
ね、入門する。



真剣に精神統一する少年たち

住居も谷中に移し、日
夜、御令室の珠月さまと
参禅并道に打ち込んだ。
大正六年、英山の道号
を受け、同十二年五月、
大事了畢して耕雲庵の庵
号を授けられる。昭和六
年五月には、師家分上に
補せられ、両忘老師に代
り、法を掌揚された。

両忘禅協会の運営と同
時に、市川市にあった栽
松塾という学生の修行者
の塾の面影を見る。

しかし、両忘協会の運営は大変で、さすがの英
山老漢も私財を投げ出してしまふ。借財に続く借
財。ついに差押さえられる。しかし家財に赤紙が
貼られながらも両忘協会を守り通してきた。
昭和十二年、英山老漢は、大法掌揚のために本
部道場を市川市国府台に土地を求め、教職につき
ながら浄財を集め、ついに道場を設立する。
昭和十六年、満洲まで足を運び、支部を結成す
るほどになる。

やがて太平洋戦争の敗戦により全く新しい時代
をむかえるにあたり、両忘禅協会から脱皮して、
あらたに、
一、視野の世界性
二、原理の合理性



長野善光宏道会会長